

# 中国語に於ける「国民性」語源論考

李冬松

「国民性」という言葉は中国近代文学史、政治思想史において極めて重要な概念の一つであり、今だによく耳にして議論される概念である。然しながら、「国民性」とは一体何か？必ずしも自明の意味がない。清末民国に於いて梁啓超、魯迅を始め、数多くの知識人が中国の国民性を深く考え、繰り返して議論したが、中華人民共和国成立後、国民性の議論が急に少なくなり、一夜明け消えたように感じられる。また、長い間、『辞海』、『辞源』を含め絶対多数の辞書に「国民性」の見出しがない。特に一番影響力のある『辞海』、『辞源』は幾回の改訂を経て未だに「国民性」の見出しがない。

一方、学術研究の分野に於いて、1993年にアメリカ籍華人学者の劉禾がポスト・モダニズムの視点から「一個現代性神話的由来：国民性理論質疑」という論文を発表して、魯迅先生の国民性思想を否定的に論じた。それをきっかけに中国学术界に国民性についての研究が一時的活発になってきた。しかし、研究の焦点は主に劉禾の国民性否定論をめぐって氏の観点を批判し、魯迅先生の国民性思想を堅持しようと主張する。「国民性」という概念について従来の認識に止まって、その語源及び意味の研究が展開しなかった。「国民性」語源に関する研究が大いに進んだのは2008年に佛教大学の李冬木先生が発表した「“国民性”一詞在日本」と「“国民性”一詞在中国」という二本の論文である。氏は数多くの明治期及び清末の文献を活かして「国民性」という訳語の生成、中国に伝わった経緯を考察してきた。

本研究は諸先輩学者の先行研究に基づいて、従来の研究に使用されていない欧米、明治日本、清末民初の文献を補強した上、「国民性」という訳語が如何に造語されたのか。そして、その語源の「nationality」は西洋に於いていつ出現したのか、元来の意味は何か、近代民族国家構築において、どんな意味変化が起きたのか、どのような機能をしたのか。

「nationality」という西洋概念は明治日本に受容された過程に英学のほかに仏学、独学も重要な役割を果たした。当時の仏和辞書、独和辞書及び国語辞典、専門辞典を利用してこの概念の翻訳を明らかにしようと試みる。特に従来の研究にあまり触れなかった「国民性」という言葉を中国に伝えた梁啓超の弟である梁啓勳を重点に於いて、彼が如何に英人 Dilthey 翻訳した仏人 Le. ban の『Les Lois Psychologiques de l'Évolution des Peuples』

(The Psychology Of Peoples) を「国民心理学与教育之关系」に訳したのか。その過程に彼が明治日本の知識を参考にしたのか。彼の訳文を明治日本の関連文献に対照しながら、彼が日本の「国民性」などの訳語を借りて翻訳を進めたことを明らかにする。

「国民性」という概念は清末に日本から中国に伝わって以来政治生態の変化に伴ってその論説主体と内容が激しく変換された。また、「国民性」は「国粹」「国性」「民族性」など一連の近代概念と語源 (nationality) を共有しているが、これらの概念はお互いにどんな関りがあるのかを別文で考察していきたい。

参考資料：

陈高原. 论近代中国改造国民性的社会思潮. 近代史研究, 1992 年第 1 期.

刘禾. 一个现代性神话的由来：国民性理论质疑. 陈国球主编, 文学史 (第一辑), 北京大学出版社, 1993.

汪卫东, 张鑫. 国民性：作为被“拿来”的历史性观念——答竹潜民先生兼与刘禾女士商榷. 鲁迅研究月刊, 2003 年第 1 期.

李冬木. “国民性”一词在日本. 山东师范大学学报 (社科版), 2013 年第 4 期.

李冬木. “国民性”一词在中国. 山东师范大学学报 (社科版), 2013 年第 4 期.

李冬松. 清末、日本を経て受容された「nationality」について. 日本大東文化大学語学教育研究所, 語学教育研究論叢 (第 36 号), 2019 年 3 月.

马西尼. 现代汉语词汇的形成——十九世纪汉语外来词研究. 黄河清译, 上海: 汉语大词典出版社, 1997.

冯天瑜. 新语探源. 中华书局, 2004.

沈国威. 近代中日词汇交流研究：汉字新词的创制、受容与共用. 中华书局, 2010.

石川禎浩、狭間直樹編. 近代東アジアにおける翻訳概念の展開: 京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター研究報告. 京都大学人文科学研究所, 2013.

実藤恵秀. 中国人日本留学史 (増補版). くろしお出版, 1970.

黄河清. 近现代辞源. 上海辞书出版社, 2010

罗竹风等. 汉语大词典. 上海辞书出版社, 汉语大词典出版社, 1986-1993.

舒新城等. 辞海. 中华书局, 中华民国 25 年 (1936).